https://rodosoken.com/

「国境」なきヨーロッパ資本主義のパラドクス
——新超帝国主義論への仮説的覚え書き——

佐々木　建

1．「国境」はなくなるか
ー「国境」なき資本主義のパラドクスー

本年1月のEC統一市場の発足を契機に、あらためてヨーロッパに「国境」なき資本主義が誕生しつつあることを告げる報道と著作が氾濫しているようにみえる。しかし、昨年のデンマーク国民のマーストリヒト条約批准拒否、フランスの国民投票における僅差の承認、通貨投機、深刻化する景気後退に象徴されるように、マーストリヒトでEC官僚が描いてみせた将来像はいまでは夢物語になりつつある。ましてやECの中部ヨーロッパへの拡大などは、東ヨーロッパの経済的・政治的混迷、民族・人種対立のなかで、はるか遠い将来の問題になってしまった。

それにもかかわらず日本の論調をみると、ことECとヨーロッパ資本主義国に関する限り、「国境」なき資本主義の実現についてヨーロッパ現地にもみられないほどの異常なまでの関心の高まりがある[1]。日本のヨーロッパ・EC問題の研究視角はあまりに経済主義的であり、実体的分析を軽視しすぎてはいないか。EC統合を恣意的にヨーロッパの全体構造から切りとって、その先進性と成功を礼賛する論者たちには、ますます深刻になる民族・人種対立の問題も、外国人排斥運動も目に入らず、EC域外の動向などどうでもよい。ただただ域内交易を分かっている「国境」の消失に注視しているだけである。

この傾向は私には分析手法の問題というよりも、最近の研究者にみられる財界寄りの「ボーダーレス」論議へのあまりにも無原則な傾斜、研究成果とジャーナリズムを通した貢献との混同、そして歴史的洞察力と批判的見地の欠落の合成であるように思われる[2]。この傾向は、論者たちが自覚しているかどうかは別として、新しい「超帝国主義」の可能性を礼賛し、その傾向を免罪することにつながりかねない。

「国境」とはなにか。それは、かつて社会主義体制と資本主義体制を分かっていた「大国境」の解体以来、ヨーロッパの市民すべてがそれを前にしてたじろいでいる対立関係である。それは市民が日常的に踏み越えるだけの、踏み越える際に通関手続きの必要な地図の上の一線ではない。その線によって枠組まれた歴史的に形成された経済的・社会的構造の矛盾と対立の反映である。EC統合の発展が止揚するものと期待された「小国境」の矮小化された通商主義的理解は、第2次大戦後の両体制の対立と経済成長がつくりだした虚構にすぎない。「国境」をめぐる対立は「国民国家」そのものの限界とか、ウィルソン、レーニン以来の民族自決権の限界と主張されることも多くなっている。しかしそのような表現にすがりつくと、直面している「国境」問題の立体的な理解には到底接近できないし、

https://rodosoken.com/

その解決の展望を示すことができない。そのように片づけるには、直面している「国境」問題はあまりに深刻である。

いま、際限のない民族自決要求によって「小国境」の分裂が急速に進んでいる。旧ソ連、旧ユーゴの解体に加えて、チェコとスロバキアの分離さえもがわれわれの想像をこえるスピードであっという間に実現してしまった。しかも、その内部で偏狭で右翼的な「民族自決」要求の当然の帰結として「民族純化」を標榜する「微小国境」へのさらなる分裂が進んでいる。この分裂への傾向は旧ソ連、東ヨーロッパ地域にとどまらない。最近のベルギーの連邦制への移行の動きに象徴されるように[3]、EC内部の国でも「微小国境」への分裂は加速するに違いない。外国人排斥運動もそのあらわれいえよう。またドイツ統一過程がつくりだした旧東ドイツ地域（いわゆる新連邦州）に対する克服しがたい格差と差別の構造も、それ自体は民族・人種問題ではないが、ある意味では同じ問題を共有している。

このような過程のなかでいま、ヨーロッパ資本主義の現実的・政治的利益の追求の秩序が新しい「大国境」として確定されようとしている。統合による「国境」の廃止、諸民族を地域的に分かつ隔壁の撤廃、民主的合衆国の形成は、リベラリストと平和主義者、左翼的民主主義者、社会主義者、そして人類進歩を願うあらゆる進歩的諸勢力にとって希求される人類の将来像であった。それが遠のきつつあるいま、そしてそれどころか、一方で「国境」なき資本主義の到来が高唱され、他方でその「国境」がますます複雑に、対立的になるという奇怪なパラドクスが現実化しつつあるいま、ヨーロッパ資本主義が行き着くところに「新しい帝国主義」への予感を感じはじめているのは、私だけではないであろう。

2．新たな「大国境」の登場と「おちぶれ」

いまヨーロッパで「国境」にかかわって展開されている過程は、一見すると無秩序に展望なしに展開しているように見える。しかしよく観察してみると、EC先進資本主義国の支配領域の重層的な再把握、新たな「大国境」の設定とそこから疎外された諸国の全面的な「おちぶれ」の過程が見えてくる。「国境」なき単一市場の完成、それを中心にしたヨーロッパ経済地域(EEA)の形成、周辺に張りめぐらされる連合協定の網の目、それが新しい「大国境」である。ヨーロッパ多国籍企業が直接に包摂する経済圏はほぼ確定され、その外に位置する国々の「おちぶれ」は加速する、これが進行している過程の特徴である。

ヨーロッパの経済的危機とその活路を説くにあたって私は、いまのような民族的小単位への分裂とその個別的なEC接近の試みは、EC先進国の支配的地位を高め、ECを基軸とする新たな大ヨーロッパ主義と排外主義を強めこそすれ、それぞれの民族の地位の向上と国民生活の改善に貢献するものではないことを強調したい。弱小民族がいまのようなやり方で「国境」を細分化し、そのことによって生産と生活の水準を長年にわたって維持してきた産業構造を分断・破壊するのでは、世界市場では到底生き残れない。これらの国を待っているのは、急激な再編によって一時的に発生した「経済的危機」ではなく、むしろ民族全体の「おちぶれ」ともいうべき状況であろう。

いくつかの例をあげよう。チェコとスロバキアの分離は、スロバキアの「おちぶれ」を促進し、その内部に新たに民族的対立をはらむことになる。多国籍企業にとっては工業化されたチ

https://rodosoken.com/

ェコをECに吸引すればよいのであって、スロバキアは不要な地域である。旧ソ連から分離されたバルト3国の独立は社会主義体制を崩壊させる引き金として利用されはしたが、その経済的自立のための支援など本格的に実施させる筈もない。旧社会主義国との経済的連鎖から離脱してECにすり寄っていっても、ポーランドにとっての活路は、ドイツその他への先進国への出稼ぎ送り出し国としての地位が残されていない。旧ユーゴスラビアやバルカン半島の国々の「おちぶれ」はいうまでもない。

それぞれの民族が独自の国家をつくる権利は、確かに普遍的権利として国際的に承認されてはいる。大国によって主導された民族政策や国際関係の歴史的誤りを修復することも当然であろう。しかしその過程はいま、先進国を基軸とする厳密な国際分業のなかで、その経済的力の格差が追いつき難い水準にまで拡大しているなかで、また深刻な世界恐慌を背景に先進国の援助能力と体制維持能力の急速な低下を背景に展開されている点を忘れてはならない。近隣諸民族との協調と連帯、そして問題の漸進的で平和的な解決を目指すべきで、そうしなければ「おちぶれ」は避けがたい。

われわれは「おちぶれ」にも似た事態からの復興と絶望的な格差からの離脱の歴史的体験をいくらかは知っている。それが「おちぶれ」克服の処方箋として強調されることも多くなっている。第1は日本、ドイツの戦後危機の克服の体験であり、第2はアジアのNIESの体験である。しかし、これらの体験が克服のモデルになるとは考えられない。前者についていえば、産業構造が基本的に温存され、危機克服のための労使の安定的な主体的条件も存在していた。また、アメリカの気前のよい経済的支援に支えられて経済的復興が可能となり、世界市場にはその過程を支えるに十分な隙間が存在したのである。このような条件はいま「おちぶれ」つつある国々には欠けている。後者のNIESの体験についていえば、多国籍企業の支配のもとに編入されうる立地的、資源的条件と労働力資源を持っていた国の体験でしかない。

このようにみてくると、いまのような条件でEC基軸の「大国境」が設定されるとすれば、その対極としてその外に放置される地域における「失われた10年」あるいは「数十年」のヨーロッパ版NIESと最貧国への分裂のヨーロッパ版を想定せざるをえない。

3．新帝国主義への予感と先進国労働運動の課題

以上のような論理の帰結は、ヨーロッパにおける新しい帝国主義の、あるいは帝国主義の新しい段階の展望であろう。しかも現実は、かつてレーニンが天才的にスケッチしてみせた帝国主義の基本的特徴に酷似しはじめている。自らの現実的利害に即応した経済的地域の切り取り、これに対応した蓄積構造の再構築、それらの地域に対する露骨な政治的圧力と軍事的干渉、そして全体を覆いつくす大国主義と排外主義のイデオロギーの発展、そして周辺における地域的覇権をかけた紛争の拡大等、それは帝国主義の基本的特徴以外のなにものでもない。もちろんこの新しい帝国主義は、かつてのように地球の全地域を分割しつくす帝国主義ではない。分断して「おちぶれ」させ、それを現実的力に応じてその限りで新たな「大国境」に経済領域を取り込む帝国主義である。

以前に私は本誌で、社会主義の解体を契機にヨーロッパ統合は重大な歴史的岐路に立たされていることを論じ、ヨーロッパがECを基軸として統一された市場圏に再編され、ECによる旧ソ連・東ヨーロッパ地域の全面的支配が実現し、

https://rodosoken.com/

ヨーロッパ世界の拡大とその内部の対立を解決できて、新しい寄生的「超帝国主義」の時代を現出させるのだろうか、と自らに問いかけてみた[4]。私は「いまの時点でこの問いに大胆に答えることは容易ではない」としたが、この1年の歴史の進展からみて、もっと大胆な提起が必要になっていると考えはじめている。

かなりの長期にわたってEC資本主義の寄生性が強化され、排外主義的傾向の支配は避けられないようにみえる。EC内部における「おちぶれ」地域から流入する外国人排斥とその制度化、そして外に向かってはその地域に対する優越性の誇示の傾向(EC優越性と古典的ナショナリズムの混交した排外主義）は衰える見通しはない[5]。新しい帝国主義への展望が支配的になり、「おちぶれ」と長期的な経済停滞を背景に、素朴な、それだけに古典的な右翼的、排外主義的潮流が台頭し、それがまたEC諸国に反作用するという関係が加速する可能性がある。

これに対し、社会主義的な、左翼民主主義的な、リベラルな帝国主義批判がますます無力感に捉えられている。現在の排外主義的統合に対し、対等の共存を実現する「統合」を目指す帝国主義批判の新しい視点の確立が求められ、その視点の有効性が厳しく問われはじめているが、残念なことに社会主義体制の崩壊と引き続く民族主義の台頭は、社会主義崩壊以降の帝国主義への傾向に対する批判者、対立者としてはその権威を急速に低下させている。

このような歴史の大転換のなかで、EC先進国労働運動はいま重要な転機にある。既得権の侵害に抵抗する防衛的な運動だけでは、新たな収奪と「おちぶれ」を基底にする帝国主義への傾向に有効に対応できない。たとえばドイツの現状をみたらよい。旧東ドイツの「おちぶれ」に対する「連帯」の展望を労働運動は見いだせないままである。まして「小国境」「大国境」の外部の「おちぶれ」との「連帯」など思いもよらないのである。場合によっては、先進国労働運動がまるがかえで排外主義的潮流の支持者ともなりかねない。ヨーロッパ労働運動の内部での新しい主体形成と運動の展望は、新帝国主義のもとでの階級関係の変化を見極め、そのもとで収奪され抑圧される諸階層との新たな多数派の形成、そのための「連帯」の思想を展開させる上で労働運動がリーダーシップを取れるかどうか、あるいは逆に労働運動の側でさまざまな市民的左翼民主主義派、リベラル派の帝国主義批判の思想と運動に柔軟に「連帯」できるかどうかにかかっている。その過程を私は注意深く見守りたい。アジアでもこの歴史的転機の兆しは見えはじめているからである。

(注)

1）藤村信も次のようにこの現状を皮肉っている。「どうもぼくのような日本人のはしくれは、海の彼方の事どもに思い入れ、入れあげすぎて、夢と現実ととりちがえる古くからの性癖がある。たとえば、当今流行のヨーロッパ統合だが、どうもヨーロッパ統合の思想が一番すすんでいるのは日本のアカデミズムとジャーナリズムの舞台のような気がしてね。ヨーロッパ人の考えていないような未来論と名論卓説が横溢している。ボーダーレスといえば、明日にも世界政府ができそうな勢いの文章が出る。……」（藤村信「歴史に病めるバルカン」『世界』1992年12月号（第575号）219ページ）同感である。

2）私の態度は次を参照。佐々木建「EC統合と日本経済」本誌1992年冬季号（第5号）

3）ベルギーは長年にわたるフラマンとワロンの文化的、経済的対立を連邦制への移行によって解決しようとしている。『朝日新聞』1993年2月8日付記事参照。

4）佐々木、前掲、5ページ。

5）私は以前にEC統合を「社会主義的合衆国」の実現の歴史的展望を切り開くものとして、その歴史的意義を高く評価したことがある。佐々木建「社会主義的合衆国の実現へ」『窓』第3号（1990年春）、84～85ページ。この態度の基本的な正しさについての確信は揺らいではいないが、既存の成果を相対化してみなければならない状況の急速な変化があることも、いまでは考慮にいれる必要がある。

（大阪市立大学教授）